

「アテネのタイモン」試論 (その一)

——タイモンの幻想について——

森 泉 弘 次

序

J. D. ウィルソンその他の研究者が指摘しているように、「アテネのタイモン」は、一方ではウィルソン・ナイトのようにこれを「シェークスピア悲劇の精髓 (the very essence of Shakespearean, perhaps of all. tragedy)¹⁾」、あるいは「ルネッサンス西欧の予言文学の中心的作品 (central in the prophetic literature of Renaissance Europe)²⁾」として最大限の評価を与える批評家が存在しているにもかかわらず、ほとんどの研究者、批評家から、一流の悲劇の名に値しない失敗作とみなされてきた。劇の構造、人物の造型及び配置が余りにも抽象的かつ図式的で、一種の道徳劇 (morality play) に墮しているという理由のほかに、主人公タイモンが、自己の運命の没落を知ったあと、この劇とはほぼ同時期に書かれたと推定される「リア王」の主人公の場合に見出されるような、極限的な不幸あるいは苦悩を通して彼自身の致命的な過誤を自覚するという、真正の悲劇の主人公にふさわしい〈経験による覚醒〉を遂げていないという理由によるものである。

私は、ウィルソン・ナイトのように、本劇を手離して絶讃する気は毛頭ない。というのは、本劇には四大悲劇に共通して見出されるような、人物造型の具象性、とりわけ主人公を社会的関連のなかで活動させ、彼を悲劇的結末に導く一因となる彼の家族関係と、彼がおかれている、そして同時に彼自身の実存的選択がつくりだしている政治的状況の周到かつ緻密な設定、および、主人公と彼

に対立する人物たちとの、互いに相手の実存、生きざま、感情、隠された動機等を照射しあう、そして相手をそれぞれの運命へとかりたてる働きをするダイナミックな劇的対話——例えばハムレットとガードルード、マクベスとバンクォー、リア王と道化、オセローとイアゴーのあいだでかわされたような——が欠けているため、四大悲劇を観るとき経験するような、劇の世界への没入と興味の持続が得られないからである。にもかかわらず、私はこの劇のなかに、私たちの心を深部からゆさぶる何かがあることを否定することができない。それは、主人公タイモンが知らずに陥っていた過誤と、彼が己の決定的破産と友人たちの裏切りとを知ったあと投げこまれた絶望と、その絶望の底から発せられた彼の言語に、私たち自身が無意識裡にそのなかにはめこまれている一定の間観、社会観の視座自体の直視を迫る何かははらまれているからである。

ジョン・ウェイン³⁾とジョン・ベイリイ⁴⁾という当代のもっとも鋭敏な批評家が指摘しているように、この劇が、作者から独立して生々発瀾と自立的活動を展開する全人的人物よりも、作者の主観と言語のほうが突出している印象を与えていることは否めないとしても、劇のリアリティを保証しているのがほかならぬ作者の駆使する言語である以上、私たちは上述の兩人も認めている、絶望し狂憤するタイモンの口から発せられるあの力強い啓示的言語のうちに、この劇の真価を発見しなければならないのではなからうか。本論は、上の問いを踏まえながら、主人公タイモンの幻想とそこからの覚醒を、彼の言語の分析を通して追究したものである。テキストはペンギン版を使用した。引用文のイタリック体は引用者による。

—

We are born to do benefits. And what better or prosperer
can we call our own than the riches of our friends? O' What
a precious comfort 'tis to have so many like brothers com-
manding one another's fortunes!

(われわれは互いに恩恵を施すべく生まれてきたのだ。友人の財産ほど自分の所有と呼ぶにふさわしいものがほかにあるだろうか。大勢の人が兄弟のように互いに相手の財産を自由に使えるというのは、なんというかけがえない喜びだろう)) (1. 2. 99-103)

タイモンの問題のすべてが、彼自身の口から発せられたこの一句に凝縮されている感がある。彼には、彼が生きている現実の世界の実態が半分しか見えていない。確かに世の人々は、分業制度のもとで、互いに他の人々にとって必要な生活資料を生産したり、あるいはそれらの流通を担当したりして、事実上相互扶助的な働きを営みつつ暮している。つまり人はひとりでは決して生きていくことはできないのだ。日本語の人間という言葉が奇しくも暗示しているように、人間は本来、他者との共同存在性において創られている。個別の人間を〈社会的諸関係の総体〉としてとらえたマルクスの定義⁵⁾も、人間存在の根源語を〈われと汝〉〈われとそれ〉という二種類の関係でとらえたブーバーの定義⁶⁾も、共同存在としての人間の、あい異った重要な位相を照射するものとして評価することができるであろう。われわれが互いに他の人々にとって必要な生活資料やサービスを提供し、交換することによって生活しているという事実は、そういう人間の在りようを端的に示しているといわねばならない。

「人間は互いに恩恵を施すべく生まれてきたのだ」というタイモンの言葉を、「われわれ人間は互いに助けあうべく創られているのだ (We are created to help one another)」と読めば、それは人間存在の本質を的確に衝いた言葉となる。ところが現実の人は、このような意味での自己自身の本質に逆らって、あたかも彼ひとりで生きられるかのように、私的独立性をつらぬいて生きようとしている。私的利害を原則として生きようとしている。家族や社会や国家への帰属や献身を表看板にかかげてはいても、それは集団的エゴイズムまたは私的共同主義であるのが一般で、他の家族、他の社会、他の国家、および具体的な個々の隣人への配慮を欠いているのが普通である。つまり現実の人は、それなくしては一瞬も存在しえぬ共同性、間柄性を本質として生きているにもかかわらず

わらず、私人 (Privatmensch)⁷⁾として私利追求的に生きているのである。己の本質に逆らって生きているのである。和辻哲郎の言うごとく、私的存在あるいは私的独立性は共同性あるいは公共性の欠如態としての人間の在りよう⁸⁾であり、それ自体、人間を共同存在あるいは公共存在として創った神への叛逆であると同時に、同胞たる他の人々の存在への侵犯であるといわねばならない。だが、これこそ人間の現実であり、人間存在のはらむ根本的矛盾なのである。

タイモンは、世の人々が貨幣を媒介として生活資料やサービスを交換することによって生活を営みながら、そのような生活を可能にしている相互扶助という人間存在の根元的規定に逆らい、市場のメカニズムを私利追求に利用している現実をそれとしてみずに、前者を実体化して、人間は互いに相手の利益を優先して行動しているのだ、と短絡的に理解し、自分の生活のために最少限必要な財産を保持しようとせず、他者の要求に応じて無制限に贈与し続けて、破産してしまうのである。タイモンは、彼自身の私利追求性に無自覚であったように、他者のそれに対しても無自覚であって、現実社会を即自的にユートピア化してしまった。彼が、彼自身の利己性、私人性にもかかわらず、他者の求めに応じて無制限に自分の財産を放出しうるのは、彼にとって他者の財産は即自己の財産であり、したがって逆もまた真だからである。この自他の区別無き気前の良さは、似て非なる気前の良さであって、自他の区別の意識を前提とした自己放棄、真の慈善の行為とは異なる。

タイモンの〈恩恵 (bounty)〉は、真に窮境にある他者の必要を満たし、彼らをそこから立ち直らせるのに役立つというよりも、濡れ手に粟、引き出そうとすればいくらかでも引き出せる黄金の庫のごときもので、彼らの自立志向をにぶらせるばかりである。そして彼のほうは、そういう似非恩恵を求めて謂集する人々をみて自己満足しているのであった。真の恩恵は、そのなかに不正に対する審きの契機をはらんでいるはずである。審きの契機をもたぬ恩恵は、求める者の状況への洞察を欠き、したがって、彼らの甘え、怠惰、利己心、御都合主義に対する批判の機能を欠くゆえに、真に恩恵としての機能を果せない。このような恩恵は、結局は受け手のエゴイズムに奉仕するのがおちで、のちに贈

り手が破産して、助けを求めてきたときに、彼を冷然と見捨てるように前もって仕向けているようなものである。タイモンの場合がその一つの例証であった。この劇のなかに瀕出する恩恵 (bounty, benefit) という言葉は、真の恩恵の頽落形態あるいはカリカチュアにすぎない。冒頭の 'It wears, sir, as it grows (世の中すすめばすすむほど悪くなる)' という画家のせりふは、「タイモンが恩恵を施せば施すほど、受け手は恩知らずになる」とも読める。実際劇の展開はそうなるのである。

歴史的にみるなら、恩恵という言葉は、人間に対する神の無償の恵みという宗教的意味のほかに、主人たる貴族が召使または奴隷に、封建領主が家臣と農奴に与える生活資料や封土を意味していた言葉である。本劇の歴史的舞台は紀元前4世紀のアテネであるが、シェークスピアがブルタークを主な材源としてこれを創作したのは17世紀初頭と推定されるから、この劇には当然当時の経済史的状況が反映されているとみななければならない。当時の英国は、エリザベス一世が45年間にわたる治世をおえて没したばかりの、ルネッサンスと宗教改革を経て近代に突入した時期にあたり、領主の恩恵と家臣・領民の奉仕とを基軸とする封建制度が崩壊しはじめ、資本主義の萌芽形態たる重商主義 (mercantilism) とともに貨幣経済が激しい勢いで社会のすみずみまで浸透していった時代であった。劇中のタイモンは、崩れゆく封建制度の基軸たる恩恵・奉仕の倫理を代表し、貨幣経済を媒介とする私利の追求を根本動機とする重商主義的な交換の倫理に対して、孤立無援の戦いを挑んで、倒れる。本劇の主題の一つが、人間にとって金銭とは何か？ という問いに在るという事実は、そういう執筆当時の経済社会のエートスを反映しているわけである。

しかし、ここで注意しなければならないのは、恩恵と奉仕を建前とする封建時代の人々が、利己主義から免かれた人々では決してないということである。なるほど重商主義およびとりわけ資本主義の時代は、いわば私利追求という動機が公然化した時代だといえることができる。しかし、そのことは封建時代においても人間の利己主義は変わらず、ただそれが恩恵・奉仕という建前の陰に隠れて暗躍していた時代だったというにすぎない。¹⁰⁾ そのことは、タイモンが破産し

て窮地に陥ったとき、莫大な借金の申し入れを、彼がかつて恩恵を施した人々に対して行なったが、いったん拒否されるや、彼が狂憤して人間世界に背を向けて立ち去ったという事実のなかに端的に示されている。否、そればかりではない。彼が己の破産にきづくまえに、助力を求めた人たちに示した過剰な好意のなかに既に示されていたともいえるのである。

5 タレント¹¹⁾の負債をかかえ、債鬼によって投獄された主人ヴェンティディアスの救助を訴える使者に対して、

Noble Ventidius! Well,
I am not of that feather to shake off
My friend when he must need me.
.....Ill pay the debt and free him!

(おお、あの高邁なヴェンティディアスが! よろしい。おれは友人がおれの助けを必要としているときにふり捨てるような男ではない。

……おれが負債を払って自由の身にしてやろう。) (1.1.103-6)

と言って援助をうけがったあと、追いかけるように

And, being enfranchised, bid him come to me. / 'Tis not
enough to help the feeble up, / But to support him after.

(御主人が獄から出たら拙宅を訪ねようお伝え下さい。弱い人を助け起こすだけでは足りない。そのあとも支えてやらねば。)

と言いそえることを忘れない。このタイモンの過剰な親切は、確かに彼の優しい鷹揚な気質の表われではあるだろうが、しかし同時にここには、彼自身の生についての根元的不安が顔をのぞかせているということも否定できない。何ものも頼みにならぬ不確かな世の中であって、目にみえる金銭や品物の贈与によ

ってかちえられるかもしれぬ友情のうちに、安心の錨を下ろそうという、鷹揚とは裏腹の、わびしい利己主義的、所有欲の動機が彼の内面に働いてはいないであろうか。このような過剰な親切の押しつけによって相手の心を自分のほうに拘束しておこうというさもしい心が。のちにヴェンティディアスが、亡くなった父の遺産を継いで、タイモンに5タレントの借金の返済を申し入れたとき、タイモンは、それでは友情の証しにならないと言い張って、頑として受けとりを拒否したが、これなども封建時代のいわゆる恩恵の觀念が、受け手に負い切れぬ無限の負債感を強いる結果になることを示している。こういう類いの相互性を欠いた恩恵に不条理を感じていたにちがいないヴェンティディアスが、タイモンが窮地に陥って、前言をひるがえし、例の5タレントの返済を要求したとき、それに応じなかったのも、忘恩のそしりは免れないにせよ、ある程度彼の気持はわかるような気がする。彼はタイモンの恩恵の觀念の自己自欺瞞性に気づいていたのではなからうか。別の友人たちから莫大な借金を重ねながら、求める者に恩恵を施して、しかも返済を要求しない、というタイモンの破滅的恩恵に、ある危険を感じとったのかもしれない。のちにタイモンが、

No villainous bounty yet hath passed my heart,
Unwisely, not ignobly, have I given.

(おれはよこしまな下心で恩恵を施したことはない。施し方は賢明ではなかったにせよ、卑劣な気持はなかった。) (2.2.178-9)

と述べた自己弁明の言葉にうそ偽りはないとしても、結果的には彼の恩恵の根無し草的無力さを暴露するものとなっている。タイモンは、人間の限界に盲目的で、みずからを、無際限に施しをすることができる神的存在と妄想していたのだ。

二

この求める者に無制限に恩恵をたれ流すタイモンという男の存在の秘密を解く鍵は何か。他愛ない言い草と聞こえるかもしれないが、多くの批評家が指摘している、本劇における、重要な女性人物の不在という事実、とりわけ賢い妻の不在という事実は少くとも一つの鍵を提供してくれているのではなかろうか。私はその事実がタイモンの運命にとってどういう意味をもっていたか追究してみたい。

タイモンの友人たち（勿論同性の）への異常なほどの過剰サービスは、彼の同性愛的傾向の露呈として解することができるのではないかと思う。背景に古典ギリシアにおける男性どうしの友情、あるいは少年愛の理想化があることはいうまでもないが。タイモンのかたわらに居るのは、多くはフレイヴィアスという忠実な男の召使頭であり、アペマンタスというシニカルな人間嫌いの友人であり、親友のアテネの将軍アルシバイアディーズであり、彼の気前の良さにたかる目的で娯集する貴族の友人たちと自称芸術家たちである。女性といえば、1幕2場に登場する仮面劇のアマゾンに扮した女性たちと、4幕3場に登場するアルシバイアディーズのふたりの情婦にしかすぎない。

アマゾンの国は、古代ギリシアの男性中心社会が分泌した影の世界ともいうべき神話的女性王国で、彼女らは男性を敵視し、強力な武装軍団をもって周囲の都市の男性軍団に対抗したといわれる。彼女らは生まれてくる子が男児の場合には間引きして、女兒のみを育てあげ、弓を射るのに不便という理由で左乳房を切り落したという。アマゾンたちは、男性の支配を憎む余り、男性の閉め出しをはかったわけであるが、男性との協力なくして女兒の出産はありえず、従って女性王国の存続は絶望であることを考えてみればわかる通り、その企ては自己矛盾をはらんでいる。アマゾンたちはいわば、男性を閉め出すことによって、かえってみずからの女性性を拒否し、男性化せんとした女性たちである。男性王国の男性たちが、女性たちを劣等亜種として軽蔑し、対等の相手として扱うことを拒否することによって、真の男性性を喪失して、似非女性性をみず

からの内部から分泌せざるをえなかったのと同様に。男を真に男らしくさせるのは女の存在であり、女を真に女らしくさせるのは男の存在である。両性が互いの分限を自覚して助けあうというところに、全人性 (Ganzmenschlichkeit) が現成するのである。

幻想的な女性王国としてのアマゾン国と対をなすかのように、タイモンを中心とする現実の男性王国が存在する。いうまでもなく、両者のあいだに相互交流、相互作用は欠けている。というより、より厳密にいうなら、前者は後者の慰みもの、附属品に下落させられている。そこで生起するのは、男性社会の中心であるタイモンの、律法 (ノモス) の契機を欠いた恩恵の思想、即ち太母神 (グレイト・マザー) 的愛情である。そこへ甘い蜜を求める蜂のように男どもが殺到する。それは本来の男性的本質からの逸脱ゆえに、必然的に過剰性を、異様な濃密さを帯びる。女性が拒まれ、周縁に追いやられている男性中心社会では、歪められた女性性が男性を通路として拡大し膨脹し、無方向的に跳梁しはじめる。求める者に限りなく贈与しつつ、いったん受け手に裏切られれば激怒して相手を呑みこむか扼殺してしまう真正の太母像とは異なり、いったん裏切られれば、狂憤しつつ自己閉鎖し、人間社会と訣別して、人気ない荒涼たる海沿いの森の中に引きこもってしまう陰気な男性的太母像？ともいうべき怪異なものが出現する。タイモンの場合がそれであった。

もしもタイモンが、同性愛的傾向を克服して、賢い愛情深い女性と結婚し、ふたりのあいだに生まれた子供たちとともに、一つの家庭をつくっていたら、あのような浪費的恩恵は許されなかったであろうし、またその必要もなかったであろう。むしろ、彼のような同性愛的独身者が陥りやすい「なげやり」と「性急さ」¹²⁾から抜け出して、求める者に規律ある親切を実行することができたであろう。しかし、そのときタイモンがもはや「アテネのタイモン」ではなくなってしまうことはいうまでもない。

タイモンは、己の性的本質から逸脱し、濃密な過剰性に酔いしれ、求める者に限りなく与え続けて、遂に破産してしまう男である。餓のように食欲な大勢の男友だちに己の存在の内奥まで食い荒らされているにもかかわらず、そうい

う鮫どもとの主観的一方的同一化ゆえに己の欠如性を知ることもなく、零に到るまで膨脹し続ける男、それが悲劇の主人公タイモンである。

三

第1幕2場で早くも作者は、忠実な召使頭フレイヴィアスの口を通して、タイモンが知らずにかかっている非現実性の罟、人間としての己の分限を忘却し、あたかも己が無限の富を所有する神々のひとりであるかのように錯覚し、求める者にきりもなく贈与を約束しながら、その約束のすべてが彼自身のぼう大な借財として彼の足もとを掘りくずしていくさまを如実に描破している。

(aside)

What will this come to?

He commands us to provide and give great gifts,

And all out of an empty coffer;

Nor will he know his purse, or yield me this,

To show him *what a beggar his heart is,*

Being of no power to make his wishes good.

His promises fly so beyond his state

That what he speaks is all in debt. He owes

For every word. He is so kind that now

Pays interest for't.

〈このさきどうなるのだろうか？ 御主人は支度せよ、高価な贈り物をせよ、と命じられるが、金庫のなかは空っぽだ。ご自身の財布のなかみを知ろうともなされないし、そのおこころは乞食並みの貧しさで、お約束を実行する資力などまったくない、という真実をお教えすることも許してくださらない。身上をはるかにうわまわるお約束を連発されるので、お口に出すすべてが借金となり、ひとこと発せられるごとに借金が増す。御親切が仇となって、

今では利息までお払いになっている。)

(1. 2. 190-9)

興味深いのは、フレイヴィアスが、タイモンがみずから知らずというよりは、あえて知ろうともせずに陥っている財政的窮状を表現するのに、「空っぽの金庫 (an empty coffer)」という言葉ばかりではなく、「乞食並みの貧しいおこころ (what a beggar his heart is)」という言葉を用いているということである。タイモンは、自分があたかも慈悲深い神であるかのように贈与の約束を連発しているが、そういう己の財政的貧しさを自覚せぬ思いあがった慈悲心は、彼の金庫と同じように空っぽで貧しいのだ、と作者は言いたいかのようにある。己が一箇の被造物に過ぎぬという人間の分限の自覚の欠如、無限主体性の自己欺瞞的意識の露呈。タイモンのこの根無し草的幻想性は、己の生の根底を支えているものについての明確な自覚が彼に決定的に欠けていること、換言すれば、己の生の根底と彼自身の実存との区別があいまいにされていることを示している。だからこそ、物欲しげな貴族たちから恩恵の化身とたてまつられて自己陶醉してられるのであろう。次の彼のことがそのことを端的に示している。

I take all and your several visitations

So kind to heart, 'tis not enough to give.

Methinks I could deal kingdoms to my friends,

And ne'er be weary.

(わたしは諸君がたびたび訪ねてくださることを身にしみて嬉しく思っています。贈り物をするくらいでは足りません。友人たる諸君に王国を一つずつわけ与えても、まだ気がすまないでしょう。)

(1. 2. 220-3)

与えても与えても満たされぬツアラツストラのようなタイモンの慈悲心は、フレイヴィアスが察しているとおおり、ほんとうは貧しいのであろう。否、淋し

いのであろう。永遠の不満児で冷笑的な人間嫌いのアペマンタスは、タイモンの一見富裕で気前の良い存在の本質的に貧しい裏面を象徴しているのではなからうか。「人間生きている奴は誰でも悪口をいわれる奴か、いう奴かのどちらかだ。死ぬ奴は、友人から御親切にも足蹴にされて墓場に行くのだ (Who lives that's not depraved or depraves?/Who dies that bears not one spurn to their graves/Of their friends' gift?)」(1. 2. 137-9)という言葉に露呈されているアペマンタスの徹底的な人間不信は、タイモンの自他未分の、愚直までの人間信頼の影であり裏である。ある意味で、タイモンは、アペマンタスに人間不信のほうはまかせておいて、それで自分は安易な人間信頼に陶醉していられるのであろう。本来ならば、アペマンタスのあの人間不信を批判的に受け入れて、一つの警告として活用すべきであったにもかかわらず。事実彼の辛らつな言葉のなかにも一方の真実は輝いている。例えば、「こんな宴会やぜいたくや虚飾がいったいなんのために必要なんですか (What needs these feasts, poms, and vainglories)」(1. 2. 247) という一句を、タイモンは一度くらいまじめにうけとめてしかるべきだったのではあるまいか。そうすれば、彼も少しは友人たちに対する盲目的サービスをつつしんだであらう。

奇妙なことは、タイモンの熱中の対象がぜいたくな宴会や高価な贈り物に限られていて、アテネにも大勢存在したにちがいない貧民の救済には向けられていないことである。後者への恩恵だって度を過ぎれば破産を招くことは必至だが、しかし彼がそのために破産したときには、彼によって窮状より救い出された貧民のうちの幾人かは、彼を助け出すために、せめてもの一灯、あるいは一掬の涙はそそいでくれたのではなからうか。それがタイモンを財政的に立ち直らせるのには無力だとしても、少くとも彼をそのような人間不信、人間嫌いの泥沼のなかに転落するのを阻止することはできたであらう。

しかし、宴会やぜいたく三昧をのしるアペマンタスが貧民を忌避して、上層の貴族階級に寄生していると類比的に、タイモンの眼も下の方にそそがれることはない。召使フレイヴィアスの忠誠や同情も、彼を対等の人間とみなし

てはいないタイモンの心を動かすには足りないのだ。

しかし作者は、タイモンの未熟さ、非現実性、無思慮という欠陥を鋭く衝きながらも、彼が愚直ともいえる底知れぬ誠実さと、子供のように無垢な信頼心の持ち主であること、そして本質的には彼は、冷酷な利己主義者、計算高い商業主義者たちの犠牲であるということを、観客に暗示することを忘れてはいない。それは、フレイヴィアスを始めとする彼の忠実な召使たちの、悲運の主人に対する真正の同情と、主人を裏切った忘恩者たちへの憤激の言葉のなかに端的に示されている。3幕2場で、彼らのひとりフラミニアスが、タイモンの友人のひとりであるルーカスのもとへ、主人の使者として借金の申し込みに来て、冷くあしらわれたときのせりふを聞こう。彼はルーカスから、自分が留守だったことにしてくれ、と手渡された3ソリダーレの銅貨を、相手に投げ返して、こう言う。

May these add to the number that may scold thee!

Let molten coin be thy damnation,

Thou disease of a friend and not himself!

Has friendship such a faint and milky heart

It turns in less than two nights? O you gods!

I feel my master's passion. This slave,

Unto this hour, has my lord's meat in him.

(この金も、地獄でおまえをやきこがす火の一部となれ、どろどろに融けた貨幣で焼け死ね! 友人に病気をうつすばかりで友情のかけらもない奴め! 友情とはこんなにもひよわなものなのか! 一晩たたぬうちに変質してしまうとは。ああ、御主人様の悲痛なおこころが身にしみて感じられる。こいつは今の今まで御主人の食卓からむさぼり食ってきたのだ。) (3. 1. 51-7)

このあとに続く3幕2場で、作者はさらにふたりの外国人の口を通して、タ

イモンの友人たちの罪状の証拠固めをしている。タイモンの使者として援助を求めにきた召使サーヴィアスを空手で帰したルーシアスについて、彼らはこういうのだ。

Why, this is the world's soul,
 And just of the same piece
 Is every flatterer's spirit. Who can call him his friend
 That dips in the same dish? For in my knowing
 Timon has been this lord's father,
 And kept his credit with his purse,
 Supported his estate. Nay, Timon's money
 Has paid his men their wages. He ne'er drinks
 But Timon's silver treads upon his lip.
 And yet—O see the monstrousness of man
 When he looks out in an ungrateful shape—

(これが世の中の真相だ。……わたしの知る限り、タイモン公はこの貴族は父親同然の情けをかけてやり、自分の懐で彼の信用を支え、領地を維持してやったばかりでなく、使用人の給料まで支払ってやった。……それにしても、忘恩の姿をまとして現われるときの人間は奇怪きわまりない。)

(3. 2. 65-75)

作者が、タイモンの召使ばかりでなく、彼と利害関係のない外国人や、彼を裏切った友人たちの召使の口まで通して、タイモンの鷹揚さと慈悲深さを裏づけて、彼の友人たちの底知れぬ貪欲と救いようのない忘恩とを糾弾させていることは興味深い。これらのせりふのリアリティが、タイモンの非現実性としまりのなさに対する厳しい批判をいささかもゆるめることなしに、観客の心に、タイモンの悲運への同情を呼びさますのである。ここにみられるシェークスピアの比類ない客観性には感嘆するほかはない。

四

3幕4場でタイモンは、うんかのごとく押し寄せる債鬼の群と、援助を求めに友人たちのもとへ派遣した召使たちが空手で追い返されてくるのを目撃して、ようやく事態の真相に眼が開かれ、たぎりたつ人間憎悪の感情をむりやり抑えつけて自宅に閉じこもってしまうが、遂に激情を爆発させて債鬼たちの前に姿を現わす。

What, are my doors opposed against my passage?

Have I been ever free, and must my house

Be my retentative enemy, my gaol?

The place which I have feasted, does it now,

Like all mankind, show me an iron heart?

(なに? おれのいえの扉が、おれが通るのを邪魔するというのか? おれは一度も罪を犯したことなどないのに、おれのいえがおれを拘禁する牢獄とならねばならないのか? おれが客をもてなしてきたこの場所が、すべての人間どもと同じように、冷酷な心をみせるのか?)

(3. 4. 80-4)

シェークスピアの劇的言語がそれ自体で人間存在の開示であることはめずらしくないが、これはその好例である。限度を知らぬ恩恵と、恩人から容赦なく借金をとりたてる酷薄な心とが跳梁するのが同じ場所であるということは、なんという皮肉であろう。あたかも、限度を知らぬ恩恵が受け手の心に、必然的に、酷薄な心を植えつけているのだ、といわんばかりではないか。そしてそれは確かに真実の一面なのだ。人間は限度を知らぬ恩恵には耐えられない。それは彼の心に、支えきれぬ重荷としておおい**かぶ**さってくる。そして彼の存在を拘束し、汚染する。彼はそれから**被い清め**られなければ自由を味わえない。それゆえ人は、貨幣をもって対価を**支払**うことによってその負債から免れよう

とする（ちなみに、日本語における〈支払い〉という語の起源は、古代祭祀上の社会的債務の解消としての〈お祓い〉¹³⁾だったという）。しかし限度を知らぬ恩恵が加える重い暗い債務意識から誰が自分の存在を祓い清めることができよう。マルセル・モースが「贈与論」で明らかにした北西部インディアンたちのあいだで行なわれてきたポトラッチの慣習——ある部族の首長から他の首長に莫大な富が公式に贈与されると、受け手は「屈辱をそそぐべく……しばらく時をおいて、高利を添えて返さざるをえない」¹⁴⁾。ときには富の荘厳な破壊をもって競争相手に挑戦することもあり、そのときには幾人もの奴隷や高価な橇犬を互いに相手の面前で殺したり、部族にとって比類なく高価なカヌーを紛砕したり、紋章つきの銅塊を海中に投げたりする——は、そういう、極端に高価な富を贈与されることによって必然的に生じる社会的債務からの祓い清めという意味を担っているであろう。

ところが、この作品で問題になっているのは、このような相互贈与または相互報酬の連鎖が断たれてしまっていて、一方（タイモン）は一方的に贈与するばかりで、受け手が返礼や返済を申しこんでくるとこれを断り、他方（受け手の彼の友人たち）は、相手（贈り手）が財政的窮地に陥って援助を求めくると、これを突き離してしまうという、いわば相互性の欠如である。神ならぬ人間に唯一許されている対人関係の原則である相互性が踏みにじられ、互いに一方的に好意を押しつけ、求めを拒んでいるという非人間的状況である。ポトラッチ慣習の根底にあるのは、贈与者が高価なものを贈与または破壊することによって始めてもちうる権力または債権の意識に対して、受け手が贈与者の権力または彼に対する債務から解放されるために同じようにふるまわねばならぬという一種の権力関係である。この見地からすると、タイモンは、与えるばかりで返済を拒むことによって、相手に必要以上の屈辱もしくは債務意識を負わせていることになる。こういう祓い清めえぬ屈辱的債務意識が、かえって受け手のなかに、権力者、債権者に対する傲岸な挑戦的態度をとらせているのではなからうか。ヴェンティディアスの場合には特にこの推測が当てはまるように思われる。

他方マキアヴェリが人間の行動の最強の動機と考えた所有欲が、彼らを忘恩的ふるまいに走らせたという位相があることも否定できない。所有欲にこりかたまった人間にとって、限度を知らぬ贈与は、拒む理由がない絶好のチャンスであろうし、彼はそれによってますます懐をこやすことに満足するばかりであり、恩返しの義務などみじんも感じないであろう。

もしも贈与者に正しい意味の批判精神が欠けていたら、受け手の利己心と所有欲は増長して、受けとることになれ、心にたこを生じさせてしまうであろう。

与えるということも学習しなければ身につかないものである。受けとることばかりしていれば、贈り手が困窮に陥った場合、すぐ立場をおきかえて救いの手を伸ばすのも、おっくうになるのかもしれない。厳しさを伴わぬ愛情、審きの契機を含め恩恵は、相手を墮落させることもありうるのだ。

(続く)

〔注〕

- 1) The New Shakespeare *Timon of Athens* (Cambridge, 1968) Introduction by J. D. Wilson: The Play.
- 2) G. Wilson Knight: *Shakesperian Dimensions* (Harvester, 1984) pp. 70-71.
- 3) John Wain: *The Living World of Shakespeare* (Macmillan, 1964) pp. 199-200.
- 4) John Bayley: *Shakespeare and Trogedy* (Routledge, 1981) p. 91.
- 5) 岩波文庫版「ドイツ イデオロギー」(古在由重訳) p. 237.
- 6) 岩波文庫版「我と汝・対話」(植田重雄訳) pp. 7-8.
- 7) 滝沢克己「自由の原点・インマヌエル」(新教出版, 1960) p. 100.
- 8) 和辻哲郎「倫理学」(上巻)(岩波書店, 昭和40年) pp. 86, 330.
- 9) 16世紀前半における英国の宗教改革が、ルターによるドイツのそれや、カルヴァンによるスイスのそれと比較して、著しく政治的かつ現実主義的な動機によって行なわれたことは争われない。それは、反ローマ教権主義、国民主義、教義的正統主義とが結びついて、英国独自の、歴史的伝統と国家的独立とを重んじる宗教改革であった。
Cf., G. M. Trevelyan, *A Shortened History of England* (Penguin) pp. 217-227.
- 10) マキアヴェリ(1469—1527)は所有欲をもって人間不変の行動動機と考えた(『君主

論」第8章)。G. H. セバインは、ルネッサンス時代に露わになった、このような個人の打算的利己心を「普遍的エゴイズム」と定義しているといわれる。

Cf. 城塚 登「近代社会思想史」(東京大学, 1960) pp. 23, 24.

- 11) 日本基督教団「聖書辞典」(昭和36年) pp. 918, 919 によると、1タラント(ギリシア語 *tálantōn* から和訳聖書ではタラントと呼びならわしている)は、34,272gの金または銀の価値を表わすものだったというから、相当な金額になるはずである。タイモンは、のちに破産して窮地を脱すべく友人に1,000タレントの借金を申し込むが、狂気の沙汰というべきであろう。T. スペンサーは、シェークスピアはおそらく始めのうち1タレントのはんとうの価値を知らずにこの語を用いていたが、あとでそのことを知って、一部記述の修正を記みたらしい、と述べている。
Shakespeare Survey 6 (Cambridge, 1953) 所収 Terence Spencer, *Shakespeare Learns the Value of Money: The Dramatist at work on Timon of Athens* 参照。
- 12) 現代思想 Vol. 11. 8「女性原理」特集号所収 松浦寿輝「独身幻想」参照。
- 13) 栗本慎一郎「経済人類学」(東京経済新報社, 昭和54年) p. 116.
- 14) ジョルジュ・バタイユ「呪われた部分」(生田耕作訳)(二見書房, 1973, 原著は1949年刊行) pp. 89, 90.